

存在と神を結ぶもの ——ハイデガーの無底の神学——

茂 牧人

ハイデガーは、ヤスパースからシェリング全集を送ってもらい手にいれた。彼は、1926年4月24日付けのヤスパース宛の手紙で謝意を述べ、シェリングの自由論を高く評価し、読み始めたことを告げている。その成果は、1936年夏学期講義に結実する。この講義において、ハイデガーは、シェリングの神についての考察を丁寧を追って、神の実存と根底との緊張関係の背後にある無底（Ungrund）の問題を洞察している。

今回筆者は、このハイデガーがシェリングの無底の問題から着想したと思われる（D. O. Dahlstrom）存在と神との関係の問題を論じてみたいと思う。それ故その前後の著作も含めた上で、1936年-40年間の『哲学への寄与』と『原存在（Seyn）の歴史』を中心にして考察する。そこでは、存在と神（神々）と現存在との三者が性起（Ereignis）として出現してくる。その中でも特に存在を脱根拠・深淵（Abgrund）として省察し、その有限な存在において過ぎ去り（Vorbeigang）としての神が現れてくるその現象を解明して、これらが何を意味しているのかということを見出したい。

まず存在の脱根拠・深淵の省察は、「根拠の本質について」（1929年）において明らかとなる。世界・内・存在としての現存在の基づけること（Gründen）としての超越をみるときに、最終的に被投性の先鋭化が起こり、その元に脱根拠・深淵を洞察できるとする。それは超越論哲学の徹底化の果てに、超越論哲学では自己根拠づけのできない場を見出すことを意味する。つまり超越論哲学は、自らが発生してくる源泉を脱根拠・深淵の中に見出す。

その後1930年代からハイデガーは、現存在の超越論的な自己根拠づけの作業に代わり、自己根拠づけの発生してくる淵源としての存在の非覆蔵性つまり真理の思索へと移行する。ここではある種の跳躍（Sprung）を遂行し、出来事としての性起を記述する立場となる。例えば『哲学への寄与』（1936-38年）において存在の真理の場を時-空（Zeit-Raum）として思索して、そこに脱根拠・深淵のあることを見出す。それ故ここで存在は、有限な存在として出現する。

さらに『根拠律』（1955/56年）においても、存在とは、主観・客観構図に支えられた対象性としての存在でもなく、超越論哲学として自己根拠づけできるものでもないことが示される。それ故根拠としての存在は、ratio, causa, principium, Ursacheではなく、それらが発生してくる源泉として脱根拠・深淵（Ab-Grund）である。

このことからハイデガーは、その存在の脱根拠・深淵を死として洞察することを明らか

にしている (SG, 186)。なぜならこの次元は、人間の支配下におくことのできない次元であり、神秘の次元、聖なるものの源であるからである。それ故脱根拠・深淵としての存在において、最後の神あるいは神々が現れてくる。(彼は、神を事物存在にしないために、神が多数であるか唯一であるかを未決定にしている。)「神は、・・・唯一原存在自身の脱根拠・深淵的<空間>において現れてくる」(GA65, 416)。さらにそれは過ぎ去り (Vorbeigang) の神として現れてくる。

ここで過ぎ去る神は、例えば「見よ、そのとき主が通り過ぎていかれた。主の御前には非常に激しい風が起こった、・・・しかし風の中に主はおられなかった」(列王記上 19 : 11) という旧約聖書の中の記述から着想されているともいえる (R. Polt)。過ぎ去りは、否定神学的な聖なるものの特徴の一つだといえよう。

哲学的に思索すれば、この最後の神の過ぎ去りは、ただ地図上のある地点からある地点へと移動するという意味ではない(J. Stambaugh)。この過ぎ去りは、無制約性、無限、絶対という形而上学的な諸規定を拒絶し、人間による根拠づけや証明を拒否する (GA65, 438) ことを意味している。ここでも形而上学的に自己根拠づけする神に対して批判をし、「神に相応しい神 (der göttliche Gott)」(ID, 65)を思索しようとしている。

この最後の神は、自己根拠づけの神の源泉としての過ぎ去りの神であり、存在の脱根拠・深淵に現れる神である。それ故人間は、静けさの内に、つまり『原存在の歴史』にあるように自己根拠づけを捨て去る貧しさ (GA69, 110) の内に近づけるのみである。

筆者は、ハイデガーのこの有限の存在と過ぎ去りの神、貧しさの思索は、広い意味でドイツの神秘思想の否定神学の流れの中に位置づけられるのであり、そこから形而上学を克服できる可能性を呈示できることを主張したい。